

我はいかにして 途上国学徒となりしか

塩田 光喜

●第九話

仁尾のモダンボーイ

二〇世紀は自動車の世紀である。

一九世紀末、ドイツのゴットリプ・ダイムラーは石油を燃料とする内燃機関による自動車の製作に成功する。だが、当初の自動車はスピード好きの貴族やブルジョワの乗馬代わりのお遊びにとどまった。

だが、一九〇三年（日露戦争の一年前だ！）、アメリカのヘンリー・フォードがフォード自動車会社を設立、大衆車T型フォードの大量生産を始める。アメリカでは、これによって自動車が一般市民の足として普及し始める。

日本でも、第一次世界大戦後の大好況によって、東京や大阪の有産市民の間で、自動車が広まり始める。だが、この頃はまだ、運転手付きの富裕層が持っているのみだ。

だが、自動車のニュースを聞いて興奮し、目を輝やかせている青年が仁尾にいた。柴尾藤吉青年、そう、祖母キクの姉「ヨッセさん」がとついだ大阪屋の跡取り息子である。

当時、京都高松でも何台も走っていなかったT型フォードを手に入れるため、藤吉青年は、ハンチング帽をかぶって宇高連絡船で岡山へ渡り、山陽本線、東海道本線（新幹線ではない！）を乗り継いで、一日がかりで東京へ到着、自動車ディーラーに金を積んで、フォードをゲット（あの

当時のT型フォードである。並の金ではない）。すぐさま、フォードを運転して帰路についた。当時は東名高速道路も、名神高速道路も、無くない。土埃の立つ道乗り継いで、大阪までたどりついた藤吉青年は車ごと船（大型蒸気船である）に乗って、高松に着き、再び、田舎道を運転して、仁尾に帰り着いたのである。仁尾で最初の自動車であった。

藤吉青年はT型フォードに恋をして、毎日、乗り廻す。大店大阪屋の商売は、祖母の姉「ヨッセさん」が切り廻すことになる。

●第一〇話

祖母キクの青春と夢

ヨッセさんが片付いたとなると、次はカコちゃんの番である。

曾祖父恵吾の商売が回り始めるようになると、祖母勝子（「キク」）は花嫁修業をするとともに、大好きなお芝居に夢中になった。当時、仁尾にあった芝居小屋には、阿波（徳島県）から定期的に人形浄瑠璃の一座がやってきて、御当地物の「傾城阿波鳴門」を初めとして、「義経千本桜」のさわり、「鮮屋の段」や「菅原伝授」のクライマックス、「寺小屋の段」などを演じた。こうした人形浄瑠璃の一座は「阿波の人形廻し」と呼ばれて、四国中を回っていた。四国には、四国八八カ所を廻る巡礼とともに、阿波のでこまわし達が巡遊していたわけだ。そうした「でこまわし」によって、四国には近世民衆の基礎教養が広く共有されていったのである。

実は祖母には、心中秘めた夢があった。倉敷で女工をしていた頃に、女工仲間から聞いた東京の洋裁学校の噂が忘れられずに、東京に出て洋裁学校に通い、洋裁の先生となつて自立したかったのだ。祖母は裁縫は達者だったし、「勝子」の名に違わぬガッツとスピリッツの持ち主だったから（口癖は「なにくそ」だ）、おそらく成功していたに違いない。だが、曾祖母コヲがそんな我がまま勝手を許してくれないはずもなかった。大体、我が一族には大阪との縁はあつたが、東京には親戚縁者、知人としてなかったから、東京へ出奔するわけにもいかなかった。四国の民衆にとつて、大正半ばをすぎても、未だ東京は遠い異郷の地だったのである。

そうこうしているうちに、お見合いが始まり、祖母の夢は儚くも、泡雪のように消え去ってしまったのである。